

チャレンジ！！オープンガバナンス 2018 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
		地域活動や市政に参画する仕組みづくり	近江八幡市
アイデア名(注2) (公開)	地域の高校生の主体的な地域活動を支援する〈八幡学〉プロジェクト		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2018 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報

チーム名(公開)	八幡学コンソーシアム		
チーム属性(公開)	<input type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input checked="" type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
メンバー数(公開)	9名		
代表者情報		田口真太郎	
メンバー情報	氏名(公開)	上田 隼也、戸簾 隼人、渡邊 里々子、森 雅貴、 大門 史果、森津 豊、杉田 信也、清水 夏樹	

(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2018_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2018 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2018@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：

「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示—非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)

4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、課題解決のために、何をやる社会的なサービス（活動）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したり、活用したくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなワクワク感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題>

- ・若い世代の市政への参加(行政の課題)
- ・若い世代の地域活動への参加（地元住民の課題）
- ・高校だけではできない、学生の主体的な地域活動のマッチングと伴走支援(地元高校の課題)
- ・教育理論の社会実装に向けた、地域資源や企業や人材との適切なマッチング(域外の大学や教育組織の課題)
- ・各取り組みが分散し、結果と実績が積み上がっていない地域学習支援の活動（まちづくり組織の課題）

<解決アイデアの内容>

◆プロジェクト概要

本プロジェクトは、滋賀県近江八幡市の若者（特に中高生）が、自分らしい進路や人生を切り開く主体性や探究心を育める地域社会を目指すことで、地域の若者の地域活動や市政に参画する仕組みを構築することが目的である。

本プロジェクトを進めることで、学校で習得した学術的な知識を基盤に、農業やまちづくりなどの実践者との協業体験から学ぶ意義を見出すことにつながり、主体的に学びを探究できる学び手を育てる。また現場での実践的学習から中高生が新しいプロジェクトや活動を生み出し実践者と共創することで、地域の文化継承や産業振興などの地域創生に貢献し、地域社会の未来創造を加速させる。プロジェクトを通じ、分断されている学校の教室と地域の現場を繋げるプラットフォームを構築することで、これらの活動をより持続可能な状態にする。

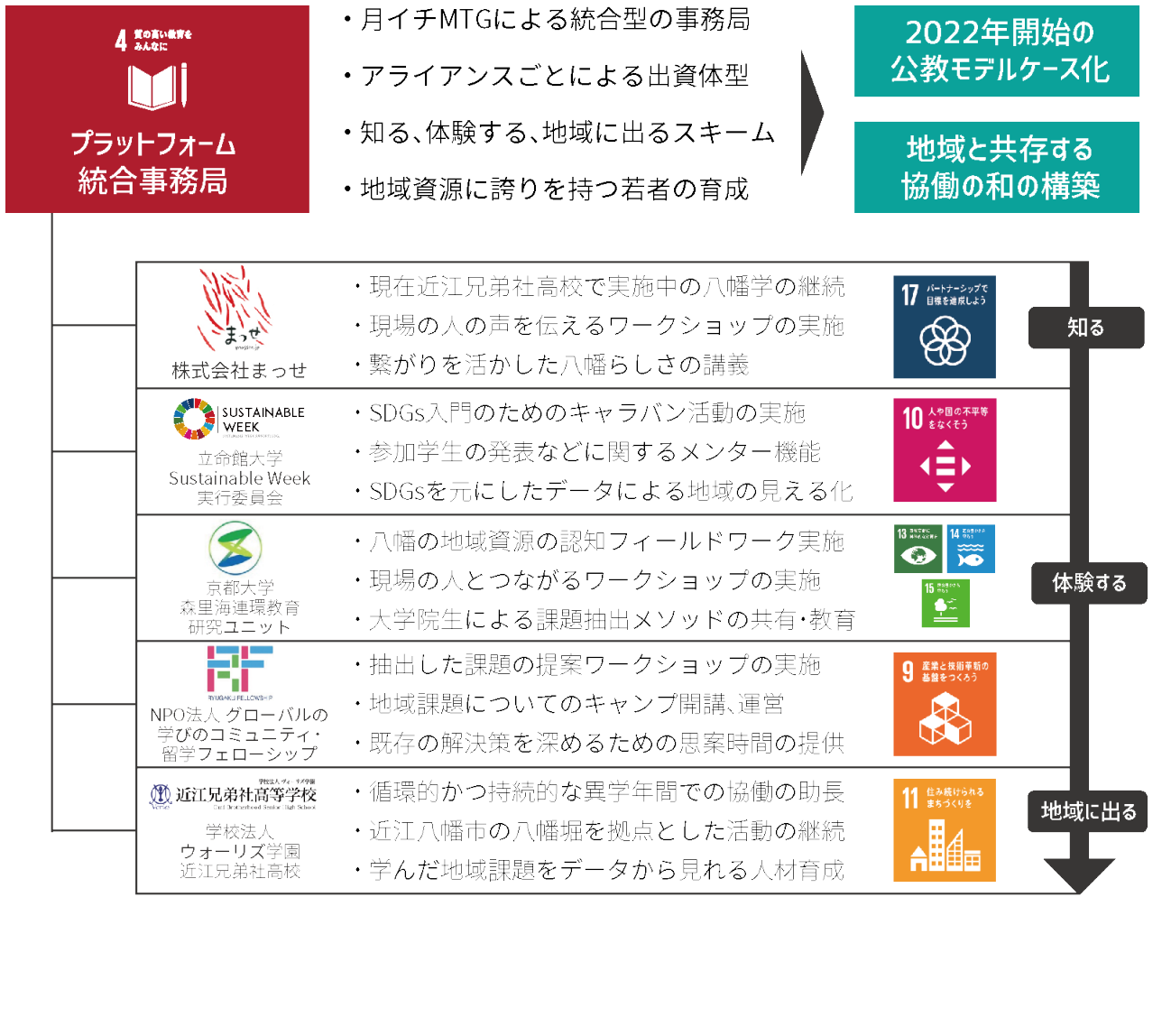


◆プロジェクトの取り組み

本プロジェクトを運営する中で、①「地域における大学生による中高生の学びの場作り」と、②「公教育と地域を繋げる SDGs プラットフォーム作り」に取り組んでいく。

これまでに株式会社まっせと連携し地域学習に取り組む「ヴォーリズ学園・近江兄弟社高等学校」、「NPO 法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップ」、「立命館大学 Sustainable Week 実行委員会」、「京都大学 森里海連環学研究ユニット」と連携し、地域を学び、地域をつなぎ、地域で活躍する人材を育成する教育コンソーシアム「（仮）八幡学コンソーシアム」を構築する。

地域における実践者ネットワーク基盤を活用し、まずは地域の中高生が農業やまちづくりなどの現場や従事している実践者と携われる場（「ゼミ」「ラボ」）を提供し、地域が持つ魅力を知る機会を創出する。地域現場における活動により従事したいという中高生に対しては、地域の実践者や大学生とプロジェクトを共創する担い手育成プログラム（「キャンプ」「マイプロ」「デモデー」）を提供し、中長期的に地域コミュニティにおける担い手としての素養を育む場を育成する。これらの活動を統合し、公教育を中心にした地域における学びのプラットフォームづくり（「市民会議」）を行うことで、上記の活動が持続的に継続し、自然発生的に生まれる状態を目指す。



(2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの資料や関連の計画、既存の施策などの定性データのことを総称します。データは出所を明らかにしてください。

◆学校教育の課題： 公共の授業実践に向けた公教育と地域との協業モデルの欠如

現代の社会的事象や諸課題について考察し主体的な探求と参画を学ぶ新必修科目「公共」が 2022 年に導入される。公共の授業実践に向けた公教育と地域の協業モデルの構築に向け一部試験的に取り組みは始まっている。福岡県ではモデル事業として討論型の主権者教育やシンポジウムが実施されているものの、日本全体で見ると実践的取り組みを行なっている地域は少なく、公教育と地域の協業モデルの確立には程遠い。

滋賀県近江八幡市においても公教育と地域が協業するモデルの構築には至っていないが、先進モデルを構築する施策や取り組みが存在する。1 つはまちづくり会社まっせが存在していること。文化継承や観光促進を中心にした事業型のまちづくり会社として地元企業や NPO や農家と協業しており、地域における基盤を構築している。また昨年からは地元の近江兄弟社高等学校に講師として授業に参画したり、滋賀県立八幡商業高等学校の外部表委員を務めたりしている影響もあり、地元の学校をはじめとする公教育の現場とのネットワークも構築されつつあり、徐々に公教育と地域の繋がりが生まれ始めている。

まっせが地域で構築した地域と公教育の基盤を活用し、昨年からは弊団体が公共の事業実践モデルとして「滋賀キャンプ」と称した事業を実施している。キャンプでは地元 NPO や民間企業、漁師や農家とのネットワークを活かし、それぞれの実践者の現場で仕事に取り組む機会と実践者対話する場を提供している。今後は市役所や教育委員会との連携・協業し、公教育と地域を繋げるプラットフォームを展開する。

◆近江八幡の課題： 担い手不足の加速

近江八幡市の地域課題の 1 つが文化や経済や観光などにおける地域コミュニティの担い手不足だ。近江八幡市のみならず日本全国の地方自治体で共通する課題ではあるが、高齢化や都市部への人口流出により次世代の担い手の育成が機能せず、地域コミュニティの衰退に繋がっている。県庁所在地である大津市や人口規模が同じ守山市と比較しても近江八幡市の高齢化率は高く、滋賀県の平均率も上回る（滋賀県：24.2%、大津市：24.4%、守山市：20.5%、近江八幡市：24.4%）（出典：政府統計の総合窓口 e-stat 2015）高齢化率も 2040 年には 32.7%に上昇する見込みで、この数値は滋賀県の高齢化率（31.6%）を上回る（出典：近江八幡まち・ひと・しごと総合戦略）

しかしながら近江八幡では市民に対しての担い手育成の施策に力を入れている。近江八幡市まち・ひと・しごと 創生総合戦略の施策の 1 つとして「地域の未来につながる活動と人材を創出する拠点を形成する」を設定し実施。水郷風景翻訳家育成事業として「水郷ガイド育成セミナー」（30 人参加）や市民と学生が共に創造的・実践的に学ぶ場として「近江八幡未来づくりキャンパス」（各回 20 人参加）などが定期的に実施されている。

昨年からは中高生が地域の担い手としての素養を育む場の提供にも注力している。近江八幡市委託事業としてまちづくり会社まっせと弊団体が協力し「近江八幡まちなかゼミ」を毎月一回開催。近江八幡市を中心に滋賀県内でまちづくりや地方創生に意欲的な中高生が参加し、近江八幡の歴史や文化を学ぶことで地域社会との新しいつながりを探求する（累計 125 人参加）。

◆プロジェクトを通じて解決したい地域課題の背景

上記の地域課題が発生する根元には2つの要因がある。

1つは公教育における偏差値教育による現場での学びの軽視。大学進学を前提として詰め込み型の偏差値教育では、「偏差値の高い大学に進学することが良い」という考えを持つ保護者も多く、点数の向上や受験に直結しない総合学習や校外学習は軽視される傾向にある。その影響から平日は日々の授業や塾での勉強、休日は部活動の練習や試合に忙殺されており、大学進学や人生選択の基盤となる地域社会に対する興味関心や課題意識を育む機会や場にアクセスしづらい状態になっている。しかしながら、国公立大学によるAO入試制度の導入や新必修科目「公共」の導入より偏差値教育に基づいた定量評価にAO入試・公共に基づいたから定質評価を重視する流れが生まれている。

2つ目は地域におけるつながりの欠如と不十分な人材育成。地域コミュニティにおける10代から20代に対する人材育成の機会や場の提供は十分とは言い切れない。現状、上記のような公教育の現場において中高生が地域の現場に触れ合う機会はほぼ存在せず、地域の魅力に気づくことができない若者が多く存在する。また地域で文化継承や産業振興などのために取り組んでいる実践者も若年層との接点がほぼなく地域インターンや就業体験、体験プログラムも提供することも難しく、地域と若者の分断に拍車をかけている。さらに近江八幡には大学が存在していないため、地域の魅力や地域の実践者に会うことなく県外進学し、そのまま見学就職という現場が発生している。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、2 ページ以内でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

本プロジェクトは、2019 年 4 月までに実施体制である「八幡学コンソーシアム」の構築を目指し、4 月以降に「未来の担い手としての中高生の育成」として 5 つの地域教育プログラムに取り組む。

○未来の担い手としての中高生の育成

1) 対話と議論から社会テーマを探求する「ゼミ」

対象：地域コミュニティや社会参画に興味関心のある滋賀県内の中高生

詳細：地域コミュニティにおける実践者を講師として招待し、まちづくりや漁業などの社会テーマについて学ぶ機会を提供する。一方的にプレゼンテーションを聞く能動的な形式ではなく、15-20 人の少人数形式で実践者の社会テーマについて対話と議論によって探求する。

指標と目標：ゼミの開催回数と参加者数→月 1 回開催・各回 20 人参加（累計参加者→240 人）

2) 実践者の現場で主体的に取り組んでみる「ラボ」

対象：「ゼミ」で探求したテーマの実践に取り組みたい滋賀県内の中高生

詳細：地域コミュニティにおける実践者が持つ農業や社会福祉の現場で、実際の仕事やプロジェクト取り組んで見る機会を提供する。「ゼミ」で探求した興味関心や課題意識を起点に 5~10 人の少人数グループで実践者が実施する活動に参画し、地域コミュニティの担い手として求められる経験や実践力を育む。

指標と目標：ラボの開催回数と参加者数→月 1 回開催・各回 10 人参加（累計参加者→120 人）

3) 地域コミュニティの担い手になるためのプロジェクトを創出する「キャンプ」

対象：「ゼミ」や「ラボ」で探求したテーマをもとにプロジェクトを生み出したい滋賀県の中高生

詳細：未来の滋賀県の地域創生を担いたいという中高生に対して、地域コミュニティの担い手として新しい価値を提供するプロジェクトを創出するための機会を提供する。3 泊 4 日の合宿形式で複数の現場で実践的な地域学習と多様な地域の実践者との対話を通じて取り組む社会テーマを模索し、地域で主体的に実現したいプロジェクトを生み出す。また最終日には創出したプロジェクトを実践者が一堂に会する市民会議で提案し、実践者との議論・対話によりプロジェクトを洗練させていく。

指標と目標：キャンプの参加者→30 人

4) 担い手として主体的にプロジェクトを実践する「マイプロ」

対象：「キャンプ」に参加しプロジェクトを創出した滋賀県の中高生

詳細：地域の実践者と伴走する国内外大学生と協業し、地域の現場をフィールドにキャンプで創出したプロジェクトを実践する。実践者や大学生と協力しプロジェクトを共創・実践することで地域社会に新しい価値を提供し、また地域社会の未来を自らの取り組みを通して創り出す経験を習得する。

指標と目標：マイプロジェクトの運営数→30 個

5) 共有発表を通じてプラットフォームを構築する「デモデー」

対象：地域の実践者、近江八幡市民、学校教員、教育関係者、「キャンプ」に参加した中高生

詳細：キャンプ終了後から3ヶ月間実践したプロジェクトの成果報告を地域の実践者や学校関係者に共有発表を行う。共有発表だけで終わらず、地域に求められる学びの形を全体で対話し議論することで、中高生が主体性や探究心を育みながらも地域に新しい価値を提供できる教育モデルとまちづくりプラットフォームを構築する。

指標と目標：デモデー参加人数→100人